

# 大学生のボランティア学習の評価に関する実証的研究

清 國 祐 二

- 一部 学生へのインタビュー調査
    - 1 インタビュー調査の概要
    - 2 インタビュー調査の分析とまとめ
  - 二部 大学生のボランティア学習の現状と課題
    - 1 青少年教育施設とボランティア
    - 2 大学と青少年教育施設との連携
- おわりに

## 一部 学生へのインタビュー調査

大学における伝統型学生の教育問題は増加の一途を辿っている。高等教育のユニバーサル化、偏差値教育の弊害からくる不本意入学、急激な社会変化がもたらす不透明な未来観などがそれを助長している。教育学部でいえば、教育者・学習支援者の資質として重要な生活体験、社会体験、自然体験等の欠如が学生教育に暗い影を落としている。これらの体験を闇雲にする必要はないにしても、青少年期に内面化しておくべき基本的事項がなければ、児童あるいは生徒の先達として教職に就くには心許ない。それが知識や理解レベルで補完できないとすれば、教職への高い指向とそれに向けた学生の自発的学習へのモラルの低下は避けられない。遅ればせながらではあるが、ある程度の体験をくぐり抜けさせることもやむを得ないであろう。大学の教育機能の充実が過去のどの時期よりも期待されている所以であるが、学生の基本的体験についての分析とそれへのアプローチは緒についたばかりである。

日本の大学では学外の活動を大学教育に積極的にリンクさせようとする発想が、実習以外に及ぶことは通常考えられない。学外の活動が大学教育の妨げになるという考え方の方が主流となっている。しかし、島根大学教育学部教育学研究室は平成11年のカリキュラム改訂の際に、教育学及び社会教育学専攻生に「学習ボランティア基礎」（1単位：第1 Semester）及び「学習ボランティア実習」（1単位：第2 Semester以降に取得）を必修化し、ボランティア体験とその意義の内面化、教育理論との統合を目指してきた。そのひとつの成果が、現在同学部が実施している学部生への1,000時間体験の導入である。

本研究は、文部科学省科学研究費の補助を得た研究課題「大学生のボランティア学習の評価に関する実証的研究（課題番号13871036）」（代表：島根大学教育学部教授・畑克明）の一環として実施したものである。学部生の社会的活動が学部教育に有効であるのではないかという仮説のもと、それをボランティア学習という比較的新しい概念を使用しながら検証した。研究方法は、必修科目「学習ボランティア基礎・実習」を受講した学生へのインタビューとその分析である。この成果は、教育学部等を中心とした大学教育の活性化につながると期待できよう。

## 1 インタビュー調査の概要

### 1) 調査の概要

平成15年6月に「学習ボランティア基礎」および「学習ボランティア実習」の授業科目を履修済みの学生に対して面接調査を行った。一人あたり30分の時間を設定し、概ね以下の9つの項目に沿って質問を行った。

- ① 授業での「学習ボランティア基礎・実習」をどう受け止めたか。
- ② 大学入学以前にボランティア活動の経験はあるか。
- ③ あなたにとって「ボランティア」のイメージとは何か。
- ④ 授業やその他の活動によってそのイメージは変わったか。
- ⑤ ボランティアの役割とは何か。
- ⑥ ボランティアをしていて困ったことや難しかったことはあるか。
- ⑦ ボランティアに対して報酬が出ることについてどう思うか。
- ⑧ ボランティアは社会に必要なものだろうか。
- ⑨ その他感じたことはありますか。

調査対象学生が必ずしも全ての項目に、あるいはこの順番で回答したわけではないが、整理の都合上、次項に8つの項目をもって報告する。

### 2) インタビューの分類

#### ① 授業としてのボランティア活動

Hさん（男性、3年）：入学直後のため必修への意識はなかった。必修だから受講したし、いい経験もできた。きっかけにもなったし、結果的にはよかった。大学の授業としてなければならぬとは思わないが、あるに越したことはない。

Oさん（男性、4年）：高校までは部活一本だったので、幅を広げた活動をしたかった。この授業はそのきっかけにはなった。それが県立青少年の家での継続的な活動につながった。現在は「無限クラブ」というイベントボランティアサークルに参加している。

Iさん（女性、3年）：確かに、1回生の時は必修だったが、2回生以降はまったくそういう意識なく参加していた。この授業がなければ知ることもなかったと思うので、導入という部分では、科目として設定されていてよかった。2回生以降は、自分のやりたい活動に参加するようにしてきた。

他の授業と比べると「これで単位をもらってもいいの？」という気持ちもあるが、多くの世代の方と関わっていい経験になり、こういう授業もいいと思う。

Yさん（男性、3年）：授業でしななかつたので、違和感があった。ただ結果的にはつながりができて、青少年教育施設に行きやすくなった。違和感のひとつに評価があって、（実際そうしてはいるが、）ボランティアを試験で評価するなんてナンセンスだとは感じた。

Nさん（男性、3年）：違和感があったが、考えてみると、自発性といっても限度がある。授業でなければ自分で探したかという怪しいので、よかったと思う。

Mさん（男性、2年）：授業で必修だったのであまり疑わずに参加した。必修がきっかけとなっ

たのでよかった。

Tさん（男性、2年）：「授業でボランティア？」との疑問は感じた。だがボランティアとは何かについて学ぶことができ、役に立った。職員の方や同回生と宿泊して仲良くなれてよかった。

② これまでのボランティア活動の経験

Hさん（男性、3年）：学校でも、地域でもほとんどなかった。大学が初めてだった。

Oさん（男性、4年）：高校ではボランティア経験はない。中学生の頃、阪神淡路大震災が起こって、生徒会長として募金活動を行ったくらいである。小学生の頃、PTA活動の一環で廃品回収など手伝わされた。そこでボランティアを意識したことはなかった。

Iさん（女性、3年）：生徒会活動の一環であったように思うが、高校生の時に希望者が福祉施設へ訪問するというボランティアがあった。高校時代に誘われたボランティア活動より、大学に来てからのボランティア活動が自分には合っている。

高校では、大学入学のためにボランティア活動や福祉活動をしておくといよい、という進路指導があった。そのことを思い出した。

Yさん（男性、3年）：母親が特別養護老人ホームで働いている関係で、施設の夏祭りの手伝いなど、他にもお手伝いでよく行っていた。小さい頃は子ども会で、しばらくすると自治会でも地域の空き缶拾いなどやっていた。小さい頃何気なく、誘われるままに地域の人たちと一緒に花づくりをしていた。それもボランティアだったといえばそうなる。中学校の生徒会活動では月に1度程度老人ホームに行くことにしていた。環境的には恵まれていたのかも知れない。

Nさん（男性、3年）：高校の時、授業の一環でグループに分けられて、駅やスーパーで募金活動をした。そもそもそのような性格でもなかったの、乗り気にもなれず、積極的に大きな声を出して呼びかけられなかった。地域でのボランティア活動はしていない。

Mさん（男性、2年）：高校の時に生徒会でボランティアで空き缶拾いをやったことがある。友達に誘われてやった。ボランティアを通じて人との触れ合いができた。ボランティアかどうかかわからないが、小学生の頃高齢者の方とゲートボールを一緒にやっていた。

Tさん（男性、2年）：学校で老人ホームや保育所でのボランティアを募集する張り紙があって参加したことがある。JRCか生徒会で募金活動をやっていたが、やらされる感覚が強かった。地域活動としては、クリーンアップ安来デーがあったり、保育園や小学校に遊びに行ったりしていた。先生の紹介で夏祭りなどのお手伝いもした。

③ ボランティア活動のイメージ

Hさん（男性、3年）：災害ボランティアのイメージだった。炊き出しとか。何か起こったときに必要となるものがボランティアと思っていた。プレーパークのような子どもと関わる活動がボランティアとは思っても見なかった。

ボランティアのイメージは「偽善的」、自分がやってみると「楽しい」。でも偽善のイメージはまわりついでくる。ボランティアしなきゃ、って無理にする必要もないと感じる。

Oさん（男性、4年）：高校生までは「偽善」のイメージがあった。今は「日常的」というイ

メージに変化してきた。人との関わりを楽しんだり、人を気遣うことができればそれもボランティアと思う。

Iさん（女性、3年）：高校時代の印象が強い。（学校側の善意）それ以上はない。

Yさん（男性、3年）：かつては「やってあげる」という気持ちがあったように思う。また、「硬い」イメージや「待ち」のイメージがあった。

Nさん（男性、3年）：イメージはわからない。中学生の頃、ちょうど阪神淡路大震災が起こり、その中でボランティアの映像を見ながら、自分もあのような行動がとれればと憧れのような気持ちを持った。でもそうはならなくて、行動力が足りないと思う。

Mさん（男性、2年）：ゴミ拾いや障害者を助けるというイメージがある。

Tさん（男性、2年）：奉仕活動とボランティアは違うような気がする。高校までは「やってあげる」意識が強かったが、大学では「やらせてもらう」や「一緒に楽しむ」という意識が強い。

#### ④ ボランティア活動体験後のイメージ

Hさん（男性、3年）：偽善や自己満足とは違うような気がしている。行ってみたら得したなあ、という感覚。それは参加者と同じレベルで新しい体験ができたということでもある。それがいいとはいえないが。

Oさん（男性、4年）：イメージというよりは、考え方や行動が変わった。人に話しかけることができるようになって、相手から刺激を受けたり、考え方の違いを認識したりした。自分の視野が広がった。人の行動を理解し、「和」をもって集団を円滑にまとめる方法を身につけたように思う。社会人と関わっていることも役に立っている。

ボランティアをやっていること自体楽しかった。ごく自然に何でもできるようになれる。車椅子が必要な人が車の乗降をしているときに自然と声をかけることができる自分を発見した。

実際にやってみることで、ボランティアが偽善でないことがわかる。小さな頃から自然にやる必要があるだろう。自分の内から自然と湧き出るものにする必要があるのではないかと思っている。

Iさん（女性、3年）：大学で経験してからは、「しなければならない」からやるのではなく、「したい」からやる、という風が変わってきた。

Yさん（男性、3年）：ボランティア観が多少なりとも変化した。「やってあげる」から「やりたい」へと変わったり、「自由」、「動き」、「積極性」、「吸収」などのイメージがしっくりくるようになった。

ボランティアのイメージに自己満足があるが、自分が満足しないと続けられない活動でもあるので、それは構わない。自分の満足が他の人の喜びに繋がればそれでよい。それだけで終わるんだったらそうだが、そこから派生するものがいっぱいある。そちらの方が大事である。

Nさん（男性、3年）：三瓶青年の家に行き、いろんな参加者の人に出会って視野が広がった。しかし、その活動の中で参加者に対して「してあげた」と思うことがあった。そのような自分を認めるとそれでいいのかと葛藤があった。そのところは、自分に対して「偽善」

じゃないかと思うことがあった。

Tさん（男性、2年）：ボランティアをやっていると「すごいねえ」となるが決してそうではない。でも一般にそう思われたくないの、ボランティア欄にはやっても書きたくない。

⑤ ボランティアの役割

Hさん（男性、3年）：県立青少年の家や三瓶青年の家など施設の時には、職員の指示に従って動く感じである。あまり積極的ではない。それに対して、プレーパークなどは自分で見つけて動かないと、誰も何も与えてくれない。

Oさん（男性、4年）：基本的には「自主的に人の手伝いをする」という理解をしている。でも、うまくまとまらないが、自分としてはいろんな人と接しすること、話すこともボランティアだと思う。例えば、初めての人と話すのは気を遣うので、それもひとつの社会勉強であるからだ。

自分が楽しいと思えるような活動をしたい。ボランティアをしようと考えてるのではなく、結果的にボランティアだった、と呼べる活動である。

Iさん（女性、3年）：ボランティアの仕事があらかじめ細かく設定されていると、違和感を感じるがあった。（自主性が損なわれてしまう。）職員との人間関係ができると、やりやすい反面、気も遣う。職員の役割がわかっているので、担当者以外の人に聞きづらくなる。

Yさん（男性、3年）：プレーパークに深く携わっているので、プレーリーダーという視点から話したい。プレーリーダーとしては、子どもが自由に遊べる雰囲気をつくるのが大事だと思う。しかし、子どもを見ながら遊びのきっかけをつくってやったり、慣れてきたら子どもたちに任せるといった段階もある。子どもが主役なのでそこへの配慮が必要だ。

⑥ ボランティアで難しかった、苦労した点

Hさん（男性、3年）：子どもとの関わることに不安があった。子どもと接することが得意ではない。自分が子ども時代にほめられることが嫌いだったので、ほめることが苦手である。意識してほめると、子どもが感づくような気がする。

同様に、子どもを怒ることが難しい。軽く怒ると子どもは構ってくれていると感じ、エスカレートする。しかし、そうやって関係がつけられればいいのかも知れない。

Oさん（男性、4年）：話しかけると拒絶するような態度の人に出会ったときに難しさを感じた。話しかけるときには「この人はどんな人だろう」と思っているが、まったく分からないこともある。子どもにその傾向が強いが、時間をかければ徐々に分かってくる。大人にもいろんな人がいるが、いちいち落ち込んでいられないし、つきあい方もわかってきた。

Iさん（女性、3年）：養護学校、障害児学級の親を対象にした事業の託児ボランティアをしたときに、障害児の理解ができていなくてとても不安を感じた。初めての場合は緊張することがある。しかし、結果的にはすぐにその不安は除かれた。親御さんや担任の先生などにアドバイスももらえ、少し障害児の理解ができたような気がした。障害児にもっていた偏見が取り除かれ、本当に貴重な体験であった。

Yさん（男性、3年）：子どもたちのトラブルをどう解決するかが難しい。親がそれに絡んでき

たときは尚更である。ある時、明らかに故意に別の子どもの新品のおもちゃを壊した子どもがいた。それを見ていた壊された子どもの親が「相手の親を出せ」という風になり、プレーリーダーが直接親同士に話をさせず、間できっちり事態を收拾させたことがあった。プレーパークの運営者としてのプレーリーダーの役割は、大学生にとってとても難しいことである。

子ども同士の関係でいえば、子どもは全責任を負えない。子どもと大人の関係であれば子どもは必ず劣勢にまわる。そこでプレーリーダーがどういう役割を果たさなければならぬか、共通認識をつくるにはミーティングなどでしっかり議論する必要がある。ひとつ間違えばとんでもない事態になることへの不安がないといえは嘘になる。

Nさん（男性、3年）：サンレイクに行ったとき、当日ボランティアだったので戸惑ったことがあった。参加者の方から、「この催しはどこでやってるんですか？」とか、創作活動の部屋で「これ手伝ってもらえませんか？」と言われたときにドギマギした。その場では、できるだけ対応するようにして、何とか切り抜けた。創作活動は何度か経験すると子どもたちに指導できるようにはなっていた。

Mさん（男性、2年）：子どもたちの中には、言うことを聞かなかったり、遊びに来ていても関わろうとしない子どももいる。多様な子どもたちを前に戸惑ったことも多い。子どもたちは考えていたよりもしっかりしていて、自分自身を振り返ってみるとそうだったような気もする。

子どもを注意することがかなり難しいということがわかった。自由に遊ばせたいし、かといってまったく好き勝手にやっていいものでもないし、周囲との関係でこちらがどう動けばまごついたこともある。

Tさん（男性、2年）：一緒に遊べる子どもはいいのだが、孤立している子どもがいたら目配りや気配りをして仲間に入れなければならないと思った。子どもたちの遊びに熱がこもれば自然とトラブルも発生する。そのような子どもたちの喧嘩にどう対応していけばよいかは重要な課題である。

#### ⑦ ボランティアへの報酬

Hさん（男性、3年）：ここに大きな違和感を感じる。偽善のイメージはこれとも関係する。最初は報酬はなかったのだから、そのままでもよかったのかも知れない。もらい始めると後には戻れない。アルバイトと同じ時給だったら殺到すると思う。

Oさん（男性、4年）：最初は「もらってもいいのかな？」と感じた。複雑な思いもあるがまったく否定するわけではない。ボランティアでも、職員に準じた働きをする場合にはあってもいいのかも知れない。時給にすると安い、仕事として割り切っているわけでもなく、楽しみながらできているし、職員も気遣ってくれるので、今のところ不満はない。もし報酬がなければ「なんでないかいな？」と一瞬は感じるかも知れない。

Iさん（女性、3年）：ボランティアでもらうのはどうかという疑問はあるが、もらえると正直なところ嬉しい。活動をしていても「もらうほどのことはしていない」と感じる場合と、「よく頑張ったごほうびだ」と思える場合とがある。もらうことが目的ではないが、両者がなれんでいればもらえる方を選択するかも知れない。もらってはいけないとは思わない。

- Yさん（男性、3年）：有償ボランティアがあってもよい。報酬を目的に行くのではないので、結果的にもらえれば「よかったな」という気持ちになる。
- Nさん（男性、3年）：深く意識したことはない。事業終了後に取りに来て下さい、といわれれば取りに行ったし、そうでなければそのまま帰宅した。ボランティアの説明会の時に「お礼を出します」という話を聞かされた時には違和感を感じた。報酬があることがあらかじめ伝えられると「仕事」みたいに感じられ、活動がしにくくなる。少し考えすぎかも知れないが、そう感じている。報酬があるかないかは、結果として出ればそれはあまり気にならない程度である。
- Mさん（男性、2年）：ボランティアは無報酬の方がよいと思うのだが、もらうと嬉しい自分がいて、複雑な思いだ。それが人間の弱さだともいえる。報酬があるのが当たり前になると、相手に負担をかけさせてまでボランティアをしなきゃならないの、ということにもなりかねない。
- Tさん（男性、2年）：青少年教育施設の主催事業の時にもらったが、「うれしい」気持ちと「悪い」気持ちが入り交じった感覚であった。本来的にはない方がいいと思うが、もらったからといってその行為が無になるわけでもない。

⑧ 社会におけるボランティアの必要性

- Hさん（男性、3年）：ボランティアという言葉はいらぬ気がする。ボランティア募集をした時点でボランティアじゃなくなる気がする。意識しすぎると、偽善というイメージが強くなる。複雑な受け止め方をしている。  
社会に出てもボランティアはしそう。でも胸を張って「私はボランティアをしています」とはいいたくない。

⑨ その他

- Oさん（男性、4年）：無償にはひっかかる。自分のやりたいことを（中途半端な職業なのに）無償でやる人に対して、そんなことなら仕事をやった方がいいんじゃないの、と思わなくはない。また職業上、教師などは視野を広げるために、ボランティアをやるべきだと思う。仕事に活かす視点もあっていいのではないかと思う。
- Iさん（女性、3年）：ボランティアは偽善ではないと思う。やっている本人は「やりたい」と思うし、「役に立ちたい」と思っている。それが偽善なら、すべてが偽善じゃないか。ボランティアをしたことがない人が偽善と思うのではないか。
- Iさん（女性、3年）：学校へのボランティアの導入はきっかけならばいいが、評価をするためのものであるとどうかと思う。客観的な評価は難しいと思う。また、小学生段階ではまだ難しいのではないかと思う。
- Yさん（男性、3年）：ボランティアを始めたときには、流れに任せて、周囲から「やろう、やろう」誘われてやっていた。好きでやってはいたんだけど、自分からどんどん動いてということではなかった。それが続けることによって主体的な関わりが変わっていった。今ではこの楽しみを他の人にも分かって欲しいと思う。しかし押しつけることはできないので難しさを感じているのも事実である。

運営する側になると、裏方の仕事も多くなるが、それも楽しんでやれている。楽しめないと、やらされているということになりかねない。自分から積極的になることが必要だと感じる。

Nさん（男性、3年）：ボランティアに参加する直前は不安である。なぜなら、活動にすぐさま入っていただけるか、うまく仕事がこなせるか、心配だからである。自分に自信がなかったり、コンプレックスがそれを邪魔している。しかし、行ってしまうと適応している自分がいて、そんな経験を重ねるとだんだん自信に繋がった。  
教育実習に行っても、ボランティア経験があったので「なんとかやれる」という自信に繋がった。

Tさん（男性、2年）：ボランティアが偽善であるという場合、大学入学のためにやるというようなことが考えられる。そう思うが、たとえ入学のためであってもやることには意義があるのではないか。やっていく中で変わっていけばそれでいいと思う。

## 2 インタビュー調査の分析とまとめ

以上、長時間に及ぶ面接調査の要点を簡潔にまとめてみた。ボランティア活動にしてもその他の社会活動にしても、何らかのきっかけがないと始めようがないことが学生たちの言葉から伝わってきた。自発性や無償性というボランティアの基本的な考え方はあるが、最初にオブリゲーションとして課せられてもその中で自分にとって大切な経験ができ、新しい人間関係ができ、次の活動へ繋がるとするならば、それ自体を問題にする必要はないという受け止め方である。柔軟な考え方ではあるが、受動的な態度であることは否めない。もし授業でもやっていなければ大学時代にボランティアをやることはなかっただろう、という彼ら自身の振り返りからも明らかである。ひと頃、「指示待ち世代」という言葉が流通したが、基本的にはそれと変わらない。もっとも「指示待ち世代」が「今の若い者は」という決まり文句とほぼ同義ととらえても差し支えないほどの意味合いしかもたないことは、どの世代を見ても明らかではあるのだが。

ボランティア経験に関していえば、地域に根ざした経験をもつ学生もいれば、生徒会活動の一環として経験した学生、果ては大学進学のためにボランティア活動を勧める進路指導体制の中での経験をもつ学生など多様である。この善し悪しをここで論議するつもりはないが、地域共同体を維持していくために当然必要な行為であるボランティアが、社会構造の隙間に形を変え入り込み、多様な用途で使われている。それが実態であり、それをにわかに変えることは困難であるし、意味があることでも無かろう。進学や就職の便宜として過度に手段化することにはいささか閉口気味ではあるが、それすらも学校あるいは教師の善意に支えられているという現実を見ると、何とも言葉をなくす。本来であれば、家庭や地域の生活の中で育んでいくべきボランティア精神であろうが、さまざまな体験が欠落している以上、一刀両断に切り捨てるわけにもいかないであろう。いずれにしても、サプライサイドの意図と姿勢は明確にしておく必要がある。

ボランティアのイメージには「偽善」がつきまとっていることはインタビューからも明らかとなった。ボランティアの経験を重ねても完全に払拭できない学生もいれば、「私はボランティアをしている」ということに拒絶感を示す学生もいる。「してあげる」という意識からは抜け出しつつあるが、青少年教育施設でのボランティア参加がほとんどであるため、「自分が楽しむ」というに範囲内での活動のようだ。それは教育学部の教育プログラムであること、学生の関心も子どもに対して高いこと、したがって青少年教

育施設との連携が最も適していることなどが上記のような学生の感じ方を誘発しているといえよう。ただ共通していえることは、ボランティアをすることによって「偽善」や「自己満足」の世界から一歩抜け出したことであろう。今後さらにボランティアの領域の広がりや参加形態の発展が期待されるが、それは各自の生き方に任されて、大学教育の中に組み込むべきものではない。

ボランティアと報酬の関係はいつも問題となる。一定の収入を得て安定した生活を営んでいる者が自身の労力と時間を使って無償でボランティア行為を行うことは成熟した成人として当然のことである。その先には社会サービスの恩恵に浴しない人々がいたり、地域で解決すべき課題があったりするからである。ところが、学生の大部分はアルバイト収入や奨学金はあるにしても、基本的には保護者からの仕送りによって、学業を本分として生活している。その彼らに交通費を使い、食事代や参加費も負担し、ボランティアに参加させることは難しい。大学としては施設とじっくり話し合っ調整し、結果的に施設の方で部分的にボランティア謝金を準備していただいている。学生は「報酬のためにやっているのではない」と思いつつも、「報酬が出ると嬉しい」とも感じている。このことが彼らのボランティア観の本質をゆがめるとは思わないが、釈然としないのは事実である。学生の中にプレーパークを主宰している者もいたが、彼らはまさに身銭を切って地域の子どもたちのために遊び場を提供している。ただそれは結果的にそうなったわけで、彼らにそれを強要することはできない。一律に考えて答えを出すべき間ではないのかも知れない。

ボランティア活動を通して、彼らは充実感や達成感とともに、苦労や困難も感じている。それは初期の段階に、あるいは初めての活動により感じているようである。青少年教育施設という関係もあるが、子どもとの接し方については異口同音に対応の難しさを話してくれた。通常、ボランティアといえばその分野での経験が豊富で、興味や関心も高く、自分自身がボランティアをすることによって充実感が得られる人がするものである。学生にとって見れば、何が飛び出すか分からない不安の中で活動に踏み出し、いろいろな戸惑いや苦労をする。結果的に彼らはその中での経験が学びに結実し、ある程度の充足感も得、次の活動の意欲へとつながるといふ成長プロセスを実感できるからこそ、活動に参加しているのである。その意味ではまさに教育プログラムとしてのボランティア体験であり、ボランティア学習である。そこを誤解してしまうと、大学教員、学生、受け入れ施設の足並みが崩れ、システム自体が瓦解してしまう。人を育てるプログラムである以上、特に大学と施設の緊密な連携が不可欠となろう。

この面接調査により、多くのことが確認できた。学生がボランティア活動をしている姿を見たり、施設職員の指導場面を見たり、両者との意思疎通を図ってきた者としては、感じていたことが概ね正しかったということが分かった。学生たちはこのプログラムで多くのことを学んでいる。これから学部として4年間で1,000時間体験を学生に課すことになるわけだが、大学教員のコーディネーター機能はさらに重要な役割を果たすことになるだろう。

## 二部 大学生のボランティア学習の現状と課題

今日、ボランティアを取り巻く状況は、その活動が福祉に限定的に考えられていた10年ほど前と比較して、領域的にも質的、量的にもかなり変化してきた。ボランティアとして活動する年齢層も世代を越え、誰もがボランティアたりうるという意識が広がりを見せ始めている。生涯学習社会の構築にとってボランティア活動が重要な役割を果たすとする生涯学習審議会答申（平成4年）にもあるように、日本におけるボランティアは新たな局面を迎えているといっても過言ではない。

「学習の成果を生かす視点」、「自己開発や自己実現の視点」、「ボランティアを媒介にした新しいネットワーク形成の視点」、「自己形成の視点」など、これまでのボランティアのイメージを刷新する視点が提示されている。一昔前の「滅私奉公」的な意味はほとんど失われ、ボランティアを「自己と他者との関係性の視点」から再構成する段階へ入ってきたといつてよい。

一方で、ボランティアが本来の意味を失い、進路決定や自己形成の手段化につながる危険性を指摘する識者も多い。事実、進学や就職に有利であるという理由から学校単位でボランティア活動を推奨したり、同様の思惑で活動を始める若者がいることも事実である。募集人数の一定割合の入学や採用に際して、その要件にボランティアを位置づける高等学校、大学、官公庁および企業などが目立つようになってきた。これらの現象が更にその疑念を助長する。ボランティア経験の評価研究は成熟しているとはいえ、上述の実験的導入の成果や実証研究において更なる議論を要するであろう。

本稿では、大学生のボランティア活動への参加がどのように学習に結実し、その成果がどのように大学生の能力及び資質形成に影響するのかに焦点を当て、彼ら自身の成長プロセスと体験の内面化を促進する支援の理論と方法について考察したい。

## 1 青少年教育施設とボランティア

現在行われている青少年教育施設でのボランティアの受け入れは、趣味や職業を通して獲得した特殊技能をもつ社会人と、ボランティアを契機として何かを始めようとする青年とに大別されよう。

とりわけ青年ボランティアの受け入れは、国立青少年教育施設（当時）が社会教育実習を本格的に受け入れ始めた時期、また震災ボランティアや環境ボランティアに関心が向けられるようになった時期、つまり1990年代後半から急速に増加していると見てよい。震災ボランティアや環境ボランティアと比較すると、いわゆる教育ボランティアの場合、特殊技能をもって指導にあたることに特色があり、本来的には概して経験の少ない青年は馴染まないのかも知れない。それを青年の貴重な体験として、あるいは体験が「学習」へと結実するという視点で、大学のカリキュラムに取り入れたのが、島根大学教育学部の取り組みである。当該大学は、学部における社会教育主事養成プログラムとしての社会教育実習を国立青年の家と対等の関係で「計画（Plan）、実施（Do）、評価（See）」する先鞭をつけた大学としても既に学会等で評価されている。

従来型のボランティア観からすると馴染まない大学生を受け入れてボランティア養成をしようと動き始めた青少年施設が増加の傾向にあることは文部科学省のデータを見ても明らかである。そのように、多くの青少年教育施設で青年層の受け入れを行い、施設ボランティア養成講座等（以降、「養成講座」）を開設するには、施設としてのそれなりの理由が存在すると考えた方がよからう。

それは青少年教育施設の目的と方針に密接な関係がある。社会の変化は青少年を取り巻く環境を大きく様変わりさせた。青少年団体の種類や構成、その活動内容にもその影響は及び、彼らが青少年教育施設へ求めるものが大きく変化してきた。従来のままの施設目的・方針ではたちゆかなくなったのである。そのギャップを埋めるために、ここ数年来、青少年教育施設はハードの整備とソフトの充実および多様化、受け入れの拡大等の側面で大きな変革を遂げてきた。「養成講座」はその一環ととらえてよいだろう。とりわけ大学生を対象とした「養成講座」は、特定の技能を高めるためというより、ボランティアとしての心構えや動機付けを重視する傾向がある。

この「養成講座」の特徴は、「青年をボランティアとして施設に受け入れること」、「多様な人や価値

観との出会いを提供すること」、「青年の成長の場をボランティアという形で提供すること」などにある。ボランティアの学習性に注目し、青年のボランティアから学び、ボランティアのために学び、その成果をボランティアに活かす、というサイクルを保障するのである。まさに学びの場、成長の場、新しい自己形成の場の提供である。

青少年教育施設とは、青少年団体がそれぞれの活動目的に応じた自主的な研修を行うためのものであった。専門職員は、その研修が効果的に実施されるよう計画段階から支援してきた。集団の達成目標と個人の発達課題が同一直線上にある場合は、それで十分な機能発揮につながるが、集団のあり方の変容や個人の志向の変化は青少年教育施設に新たな選択肢を要求し始めた。それが学校週5日制プログラムやファミリープログラム等の新しいタイプの主催事業の登場と青年対象の「養成講座」につながることになる。後者は青年を「参加者」から「協同者」へとパラダイムを転換し、青年および施設職員双方の意識変革をもたらした。そして前者への協同参画が青年の成長をサポートする。以上のような前提にたてば、青少年教育施設における青年へのボランティア活動の提供そのものが青年の研修プログラムとなりうるのである。

## 2 大学と青少年教育施設との連携

事例研究として、国立三瓶青年の家（「国三」）、島根県立青少年の家（「県青」）と島根大学教育学部（「島大」）との連携を取り上げる。

ここに紹介する理由は、学生の自己形成に青少年教育施設の機能が大いに役立つことを実践的に試みる事業であるからである。

### 1) 概要

まず、大学サイドのカリキュラムである。現在、生涯学習課程社会教育コース専攻生については、大学のコース専門科目に「学習ボランティア基礎」（1年前期1単位必修）と「学習ボランティア実習」（各学年1単位設定、計3単位のうち1単位選択必修）を設定している。「学習ボランティア基礎」は、「国三」、「県青」及び「島大」の三者の共同プログラムである。施設側からすると、これから4年間大学に在籍する学生に、施設での活動を紹介するとともに、彼らの時間と能力を施設運営の中で積極的に生かしてもらおうとする意向が働いている。「社会教育施設ボランティア養成講座」という名称で主催事業に位置づけながら、企画、実施、評価すべてに大学も含めた担当者が関わる文字通りの共催事業である。

### 2) 経緯

教育学部の改組に伴う新課程発足とともに、社会教育主事の資格要件に該当する科目を開設するに至った。その中の「社会教育実習」を「国三」との連携で実施することになったことが布石となっている。数年の実施経過を踏まえ、大学3年次に社会教育実習として行う約10日間の「国三」体験だけで社会教育の現場を理解することは必ずしも十分ではないという結論に達した。限られた日程で組まれたプログラムでは、青少年教育施設の概要を体験し理解することはできても、事業ごとのねらい、計画立案、実施、評価というサイクルを追体験することはできない。受動的な学びから、主体的で能動的な学びを生み出すには実習を補完する他の方法が必要であろうということになった。そこで、平成5年度より大学1年次の段階で施設の事業を体験し、希望者を施設ボランティアとして登録し、その体験を活かして

その後の主催事業にボランティア参加を可能にするルートをつくりだした。これが社会教育実習へとスムーズにつながる基礎となり、施設の機能を把握した上での実習参加へと高める契機となっている。このことが4年間を通したボランティア参加に繋がっていくことは言うまでもない。

### 3) 成果

「国三」での実習を通して、学生は様々な体験をする。施設の業務や職員との関わりは言うに及ばず、他のボランティアや多くの施設利用者と、主催事業や研修を通して関わりをもつ。そこにテキストはなく、学生各自の強い意欲や豊かな感性が活動の意味付けを行う。その意味付けとは、自分自身の内にとどまらず、活動プログラムや参加者のあり方に及ぶ多様なものとして出現する。それらが成果として次のボランティア参加への動機付けと繋がる。活動の継続という観点からもうひとつあげると、学生と施設職員との出会いである。施設職員との人間関係という一見単純な構造であるが、活動のしやすさやコミュニケーションの良好さが継続的な活動へと繋がるか否かに大きな影響を与える。本質的な部分からはそれるが、重要な課題としてここで述べておく。

### 4) ポイントと課題

#### ① 単位認定について

当該事業は三者の意図が微妙に異なるため、その位置づけが複雑である。「島大」としては単位認定を行う正規の授業科目であるが、他大学の学生には適応されない。科目等履修生として履修すれば不可能ではないが、費用負担や単位互換の制約が生じ、実質的には機能しにくい。今後は、大学相互の連携が強化され、コンソーシアムやコラボレーション等の積極的な結びつきにより、単位互換制度などの運用の中で発展の可能性はあるが、現状ではそこまで進んでいない。施設としては学社融合事業と銘打ち、「島大」のみならず他大学あるいは勤労青年にも広報し、ボランティア層の拡大を図ろうとしている。相互にメリットを享受しなければ継続しない連携事業であるがゆえに、今後の制度面での工夫は必要となろう。以上のような制度的課題はあるにしても、施設の機能拡張やサービス向上のために継続的な活動に繋がるボランティアの育成とその定着を重視し、三者の緊密な機関連携を意図していることに揺るぎはない。

#### ② 費用弁償について

視点は異なるが、費用弁償について触れておきたい。社会教育施設ボランティア研究会「社会教育施設におけるボランティア活動の現状」(1998年)によると、「ボランティアへの経済的支援」の項目において、国立青少年教育施設では65.2%が交通費を、56.5%が食事代を支給していることがわかる。県・市立も同様に、48.5%が交通費を、60.3%が食事代を支給している。ボランティアは本来的に対価を求める活動ではなく、自分のもちうる技能をできる範囲で役立てるというところにある。その意味でパートタイマーとは一線を画するわけだが、現実には支払われている場合もある。この点については議論が十分尽くされておらず、コンセンサスを得るにはいたっていない。また、コンセンサスに至ることが妥当であるかどうか判断し難い。ここでは、その是非を議論するのではなく、調査結果のような施設による格差がどのようにして生じるのかについて触れることにしたい。

この結果は、国立青少年教育施設の立地条件とも大きな関連がある。これらの施設の大部分は地域特有の豊かな自然に恵まれた立地である。ボランティアの生活行動圏とはかなりの距離を隔てる

場合が多い。施設までの往復の移動時間と活動時間を考慮すると、ボランティア活動をするために少なくとも1日は費やすことになる。移動のための費用も必要となる。こうなると、活動に当たっては、体力的、時間的、金銭的にも、活動頻度にも制約を受けることになる。ボランティアの生活行動圏にある公民館や図書館、博物館などは基本的な条件が異なる。

社会的な経験、豊かな人間関係、地域や施設との日常的な関係のみならず、経済的な自立と安定の点においても、学生であることは一定のハンディを生じさせる。交通費や食費を支払ってボランティア活動を継続することは実際には困難である。学生ボランティアの場合、経済的な安定の上にボランティア活動があるのではなく、むしろ精神的な側面での成長や新しい人間関係の創出に期待を膨らませて参加する場合が多い。このような条件の下、ボランティア本来のあり方を損なうことにはつながらないとの判断から、青少年教育施設の多くが金銭的な援助に踏み切っていると考えられよう。

## おわりに

青少年教育施設でボランティアを実践する場合、社会人と青年とではその目的や活動内容に大きな相違が生じる。前者の場合、趣味活動や職業経験の中で獲得した専門的な知識や技術を生かして、指導的な立場でボランティアに関わることが多い。自然観察、野外活動、スポーツ、レクリエーション指導等どれをとっても優れて専門的であるといつてよい。それに対し後者は、現状では主催事業等の運営補助（準備、受付、会場整理等）がまだまだ中心であり、部分的に指導またはその補助（芸術・文化活動、スポーツ・レク活動、野外活動・自然観察等）の役割がある。一方、学生という立場は長期の体験事業に長期休暇を利用して全日程参加が可能であるというメリットももちうる。

本稿では、ボランティアの本質論やその是非を問うことよりは、大学と青少年教育施設との連携によって大学生の資質形成を図ろうとする試みを省察した。その意味では、青少年教育施設におけるボランティア、その中でも対象を大学生に特化した関係で、普遍性や妥当性を欠いたことは否めない。しかし、現実にはボランティア活動が大学生の将来に影響をもつ行為として、自分探し的手段として、社会参加の契機として、年齢や所属を越えた他者との関わりとして、重要な意味をもち存在している事実を直視する必要がある。今後、ボランティア活動や体験活動が大学生の教育や学習に積極的に位置づけられていこうとしているが、マス化してくと生じてくる新たな課題もある。方向としては、一研究室の提供する授業科目から学部あるいは全学として取り組める、よりシステムティックな仕組みをつくりだすことが望まれよう。

